

令和七年 第四回例会

観世流

緑泉会

十二月六日(土)

午後二時開演(正午開場)

矢来能楽堂



「楊貴妃」
シテ 中所 宜夫 (撮影 芝田裕之)



「邯鄲」
シテ 桑田 貴志 (撮影 駒井壮介)

能 Noh	楊貴妃	Youkihi	桑田 貴志
狂言 Kyogen	呼聲	Yobigoe	大藏 教義
能 Noh	邯鄲	Kantan	新井 麻衣子

令和七年 第四回例会 番組

能 楊貴妃 桑田 貴志

方士 御厨 誠吾
蓬萊国ノ者 上田 圭輔

大鼓 原岡 一之
小鼓 鶴澤 洋太郎 笛 藤田 貴寛

後見 石井 寛人
鈴木 啓吾 金子 仁智翔 永島 充
地謡 奥川 恒成 奥川 恒治
中森 健之介 中所 宜夫

狂言 呼聲

太郎冠者 大藏 教義

主人 大藏 基誠
次郎冠者 大藏 康誠

後見 富田 昌美

卷

絹 奥川 恒治

仕舞 放下僧

小歌 津村 禮次郎

葵 上 墨 敬子

石井 寛人
中森 健之介
坂 真太郎
筒井 陽子

【休憩十五分】

能 邯鄲

舞童 新井 弘舜
虚生 新井 麻衣子

勅使 野口 能弘
大臣 野口 琢弘
大臣 梅村 昌功
大臣 御厨 誠吾
興昇 則久 英志
興昇 吉田 祐一
宿ノ女主 善竹 大二郎

大鼓 國川 純 太鼓 姥浦 理紗
小鼓 寺澤 祐佳里 笛 八反田 智子

付祝言

後見 坂 真太郎
津村 禮次郎

金子 仁智翔 永島 充
石井 寛人 中森 貫太
地謡 奥川 恒成 中所 宜夫
筒井 陽子 鈴木 啓吾

【終演予定 午後五時】

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。
演能や他のお客様の迷惑となる行為は、遠慮願います。場台によってはお断り頂く事もございますので、ご了承ください。

能

楊貴妃 (ようきき)

舞台には、冥界にある楊貴妃の宮殿に模された、小宮の作り物が出される。次第の囃子で玄宗皇帝に仕える方士(ワキ)が登場し、亡くなった愛妃・楊貴妃の魂魄を訪ねよとの勅命を受けて、蓬萊宮を訪ねる子細を語る。方士は、幻術をもつて黄泉の国へ船出し、常世の国へ至る。その地の者(問狂言)に楊貴妃のことを尋ねると、玉妃と言う人がそれであろへと教えられ、太真殿に向かう。その壮重美麗な有様に圧倒されていると、建物の中から玄宗との日々を懐しむ声が聞こえるので、帝の勅使が来たと告げられ、内より応答があり楊貴妃(シテ)が現われる。地謡によつて「梨花・枝雨を帯びたる装いの」と謳われるその有様は、儚く美しい。

方士は帝の嘆きを伝え、貴妃はますます恋しさを募らせて悲しみに沈む。方士に形見の品を請われて天冠の立物を与えるが、蓬萊宮を訪れた証拠として、二人で交した秘密の言葉教えて欲しいと言われ、貴妃はさらに比翼連理即ち「天にあらば願わくは比翼の鳥とならむ。地にあらば願わくは連理の枝とならむ。」という言葉を伝える。実際にはそうならなかった現実を悲しむ貴妃を他所に、勅命を果して勇んで帰ろうとする方士を、貴妃は暫し引き留め、再び立物を天冠に戻して、在りし日の夜遊の舞を再現してみせる。この「霓裳羽衣の曲は帝自ら作曲した曲なので、また帝への思慕に涙が溢れてしまふけれど、莊子が見た胡蝶の夢のようこの世は儚く、老少不定の嘆きは最も甚しいのです。」貴妃は玄宗との日々を回想しつつ舞を舞い、ゆつたりとした《序之舞》で羽衣の曲を再現する。舞が終わわり、方士は再び簪を賜り、喜んで都へ帰って行く。楊貴妃は悲嘆に暮れたまま、一人蓬萊宮に留まる。

狂言

呼声 (よびこえ)

主人(主アト)は次郎冠者(アト)を連れて、勤めに出来た来ない太郎冠者(シテ)を叱責しにやってくる。叱責するのが嫌で居留守を使う太郎冠者だったが、声からそれと知れる。作り声をしたたり、平家節に乗せたり、様々に工夫を凝らすうち、やがて踊節でのやりとりとなり…。

仕舞

卷絹 (きり (まきぎぬ きり))

天神に歌を献じた下人の罪を赦させるため、神は巫女に憑いて神勅を伝えた。阿弥陀如来、薬師如来などの助けを借りて、自分に憑いている神々を上げるため、巫女は御幣を激しく振り乱し、飛び跳ねて舞い、ついに神上げを成就する。

放下僧 (ほうかそう こうた)

親の仇を油断させるため、放下僧となつて近づいた男は、小歌を舞つて仇を眠りに誘う。都の名所を詠み込みながら軽快に進む小歌には、少し猥雑な裏の意味もあるようだ。

葵上 (あおいのうえ)

病床にある葵上に取り憑いた六条御息所の生霊は、抑えられない嫉妬をぶつけるが、照目の巫女によつてあらわにされた自分の有様を恥じて、もとの破れ車に乗つて姿を消す。

能

邯鄲 (かんたん)

最初に舞台脇座に引立大宮が出される。宿屋の二室であり、後に夢中で楚王の宮殿となる。続いて、宿の女主(問狂言)が邯鄲の枕を持つて登場し、枕について語り、引立大宮に据える。次第の囃子で、生きる意味を求める内省的な青年、盧生(シテ)が登場する。楚国の羊飛山に賢人がいると聞いて、訪ねる途中、邯鄲の里に泊まることとなり、女主に宿を請う。そして夢中に悟りを開くという邯鄲の枕があると聞いて、その枕で眠りにつく。

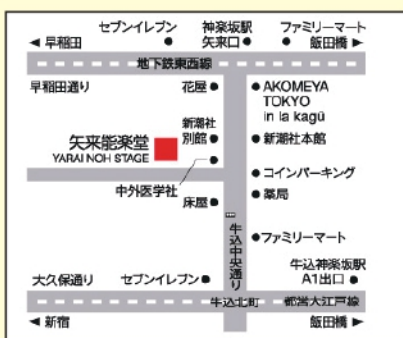
勅使(ワキ)が登場して盧生を起こし、楚国の帝の位を盧生に譲るために来たと告げる。驚く盧生だったが、光輝く玉の輿に乗せられて行けば、宮殿は月に照らされて壮麗に輝き、庭には金銀の砂、出入りの門も美しく、行き来する人々も着飾つていて、天界にあるという喜見城のようだ。舞童(子方)や臣下たち(ワキツレ)もうち揃い、捧げ物の宝物は溢れ、帝を讃える声は地に響くばかり。東には銀の築山に金の太陽を出し、西には金の築山に銀の月を出して、この栄華は永遠に続くかのようだ。

五十年が過ぎて栄華はなお極まり、「天の濃漿」という仙薬や「沆瀣の盃」という仙人の杯を献ずる者まで現れる。舞童が立つて酒を注ぎ、栄華を祝福して舞を舞えば、帝も《楽》の舞を舞う。途中まで、宮殿に模された引立大宮の中で壮重に舞つていた帝だったが、「瞬足を踏みはずし(これを「空下り」と言う。この曲だけにある特殊演出)、夢から覚めそうになり、その後は舞台に下りて軽快に舞う。楽が終り、しばらく栄華は続いているが、やがて時間の流れが歪み始め、ついには全てが消えて夢が覚める。宿の女主が「粟の御飯が炊けました」と盧生を起こす。茫然と目覚めた盧生はしばらく栄華の有様を思いつ、現実との違いに思いを向けるが、全てが夢なのだと知り得て、枕に感謝し帰って行く。

2025.
12.6 (土) PM1:00 (正午開場)
矢来能楽堂

〒162-0805 新宿区矢来町 60
☎ 03-3268-7311

地下鉄東西線神楽坂駅下車 矢来口より徒歩 2 分
都営大江戸線牛込神楽坂駅 A1 出口より徒歩 5 分
駐車場はございません。
近隣のコイン駐車場をご利用下さい。



入場料 (全自由席)

会員券 (年 4 回) 一般 20,000 円 学生 10,000 円
1 回券 (当日券) 一般 6,000 円 学生 3,000 円

申込先: 各出演能楽師または緑泉会まで

桑田 貴志 TEL&FAX 03-3643-0891
新井 麻衣子 TEL&FAX 04-2946-8389

令和 8 年 第 1 回例会 2 月 15 日 (日)

素謡……神歌 Kamiuta …………… 津村 禮次郎
能……高砂 Takasago …………… 坂 真太郎